

令和 4 年 5 月 10 日現在

機関番号：11401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2021

課題番号：19K02802

研究課題名（和文）書くことに関する「言葉による見方・考え方」とその指導法としての「文種換え」の研究

研究課題名（英文）A Study on Teaching Japanese Writing: With a Focus on the "Point of View and Way of Thinking About Language" and "Changing Genres of Writing"

研究代表者

成田 雅樹（NARITA, Masaki）

秋田大学・教育文化学部・教授

研究者番号：50361217

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、小学校国語科の「書くこと」領域について、「言葉による見方・考え方」の具体例を解明し、これを学習者が働かせる「文種換え」という言語活動の指導法を提案することを目的とした。

1年目には、「言葉による見方・考え方」のリストを作成して論文を発表した。2年目には、研究協力者が実施した授業を分析して、「文種換え」の指導法に関する論文を発表した。3年目には、「文種換え」のカリキュラム等を整理して、体系的な実践理論に関する論文を発表した。以上によって、小学校の授業で「文種換え」を実施するために必要となる資料を提供することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、「言葉による見方・考え方」とは具体的にどのようなものか、それはどうしたら身に付くか、それを働かせるにはどうするか、という小学校国語科「書くこと」の授業研究における学術的な問いに解答を示した。また、令和2年度の新教育課程実施の前に、「言葉による見方・考え方」の具体例のリストを示し、その獲得や発動に有効な「文種換え」という言語活動を開発した点で、「書くこと」指導に寄与する資料を提供するという社会的な意義を有している。

これにより学習者が、目的や相手の違いによって求められる文章の姿を意識して文種を書き分けるという「実社会に機能する活用型の学力」を習得することが期待できる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to elucidate specific examples of "ways of seeing and thinking through words" in the area of writing in elementary Japanese language classes, and to propose a teaching method for a language activity called "sentence substitution" that allows learners to work with these ideas.

In the first year, a list of "ways of seeing and thinking through words" was compiled and a paper was presented; in the second year, the classes conducted by the research collaborators were analyzed and a paper on the teaching method of "sentence substitution" was presented; in the third year, the curriculum of "sentence substitution" was organized and a paper on a systematic theory of practice was presented. These efforts provided the materials necessary to implement "Bunseki Kaito" in elementary school classes.

研究分野：教科教育学

キーワード：文種換え 言葉による見方・考え方 書くことの学習方略 書くことの資質・能力 自覚知化 深い学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 学習指導要領の要請

平成 29 年 7 月告示の小学校学習指導要領国語では、資質・能力を育成するには「言葉による見方・考え方」を働かせることとなった。しかし、研究開始当初「言葉による見方・考え方」が初めて登場した概念であるにもかかわらず、小学校学習指導要領解説国語編には「説明」はあるが、領域別の「具体的な例」は示されていない状況であった。

この「言葉による見方・考え方」については、学校現場では難解であるという声が多かった。

(2) 国語科の研究状況

この「見方・考え方」は各教科で求められるようになったのであったが、国語科においては、西郷竹彦や文芸教育研究協議会などの認識教育を重視する立場を除くと、「見方・考え方」はほとんど扱われてこなかった。しかも、西郷らの「見方・考え方」は一般的な事物や事象に対する「見方・考え方」であり、「言葉による見方・考え方」ではなかった。このため、新教育課程の本格実施を控えて不安が広がっていた。

(3) 研究の進展状況

この状況に対応してわずかながら、文献が出されていた。例えば、『「見方・考え方」を鍛える小学校国語科の「思考スキル」』（伊崎一夫編著 2018.2.3 東洋館出版社）は、実践事例が「読むこと」を中心としていて「書くこと」に関するものは数例であった。また「言葉による見方・考え方」についても「説明」はあるが「具体例」がなかった。『見方・考え方国語科編』（中村和弘編著 2018.2.25 東洋館出版社）は、実践例ごとに「言葉による見方・考え方」の具体例が示されているが、やはり「読むこと」に限られていた。このように、「書くこと」に関しては「具体例」が依然として示されていない状況であった。

2. 研究の目的

(1) 3つの疑問

以上のことから、小学校学習指導要領国語が求める指導をするに当たって、次の3つの疑問の解明が求められていた。

まず、「言葉による見方・考え方」とは具体的にどのようなものか。

次に、それはどうしたら身に付くか（学習直後の学びの省察と「文種換え」の問題）。

そして、それを働かせるにはどうするか（見通しをもつために過去の学習をふり返る「経時」の省察の問題）。

(2) 2つの研究目的

したがって、本研究の目的は大きく次の2点になる。

目的1 「書くこと」の指導に当たって必要となる学年別・文種別・文章制作過程別の具体的なレベルで「言葉による見方・考え方」を解明し提案する。

目的2 これを自ら用いる学習者を育てる方法として「文種換え」という言語活動を試み、学年別・変換する文種の組み合わせ別の実践事例を挙げて、具体的なレベルで授業展開の方法を提案する。

これによって、文種特性の違いを踏まえて書くための方略が、書くことに関する「言葉による見方・考え方」として学習者に自覚され、全国学力・学習状況調査等で課題に挙げられてきた「条件に応じて書く」力を育て、「深い学び」を獲得させることが期待できる。

3. 研究の方法

(1) 「言葉による見方・考え方」の具体例のリストアップ

研究初年度は、書くことに関する「言葉による見方・考え方」の一覧表試案を作成した。この一覧表は、学年別・文種別・文章制作過程別に分析したものである。

当時使用されていた小学校国語教科書（東京書籍）を資料として、「言葉による見方・考え方」の具体を抽出した。

(2) 「文種換え」の指導法開発のための検証授業の分析

研究2年目は、単元や単位時間の始め及び終末における省察の方法を解明するため、検証授業を分析して省察の適切な時期と効果的な方法を解明した。

かねてより共同で研究をすることの多かった、東京都江戸川区立小学校の指導教諭の協力を得て、授業を記録し児童の学習状況を分析した。

(3) 「文種換え」の実践理論の体系化

最終年度は、「文種換え」の具体的な展開方法を体系的に整理するために、「文種換え」の

先行研究・実践や類似研究・実践を分析した。その際、研究代表者が秋田県総合教育センター等の研修講座で使用した資料や、学部・大学院の授業で検討した実践を分析し、「言葉による見方・考え方」を確実に効率的に身につけるには、どのように「文種換え」を実施すべきか検討し、実施の条件や留意点、年間指導計画への位置づけ、単元の展開パターンなどを整理した。

4. 研究成果

結論としては、研究の目的を概ね達成した。

(1) 「言葉による見方・考え方」の具体提示と下位分類の解明

すなわち、小学校の全学年、全文種（言語活動例）について、相互に踏まえたり更新したりする関係も含めて、どのような「言葉による見方・考え方」が、どのように獲得され、その後どのように働かせることになるか、具体的な単元・教科書教材に即して示すことができた。この研究の過程で明らかになったことは、主に以下の事柄である。

下位分類の3層

「言葉による見方・考え方」には質的に違いがあり、3つに分類できる。1つは基盤となる価値意識（C）で、「～することはよいことである。」といった、学習に対する本質的な態度の表れである。2つめは、「見方」に関するもので、着眼対象をどう捉えているかという対象認識の表れ（A）である。これは「～は～である。」といった命題形式の宣言的知識である。3つめは、「考え方」に関するもので、知識や概念等を操作する思考の際に働く、操作や手順に関する方法的知識・手続き的知識の表れ（B）である。「～については、～と～との異なる確認から始めるものだ。」といった、常識・留意点・教訓・ポイントの表現になるものである。

3つの層の関係

1つめが2つめと3つめの基盤になっていると考えられる。

この結果は、2020年3月発行の『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』の第42号に「書くことに関する『言葉による見方・考え方』とその指導法としての『文種換え』の研究(1)」という論文にまとめた。（査読なし、pp.15-28 <https://air.repo.nii.ac.jp/>）

(2) 「文種換え」の指導法の解明

また、指導法「文種換え」について、検証授業を実施し、その考察から教育効果や指導上の留意点等を明らかにした。主な考察は以下の通りである。

未習の文種の習得も可能

「文種換え」をするには、換える前後ともに既習の文種であることが原則であるが、未習の文種も扱うことが可能である。したがって、「文種換え」は既習文種の反復・習熟のためだけでなく、新たな文種の学習方法としても有効であることが確認できた。

文種換えの実施適時

「文種換え」の適時は、文種を換える前の文種と換えた後の文種の両方、あるいは一方（換える前）が既習となる時期が適切である。

3つの層の獲得に有効な活動

「言葉による見方・考え方」の下位分類ABCについては以下のことがわかった。事前の省察においては、すでに書いた具体的な文章を比較することが、Aを含みつつこれを踏まえたBに相当する「文種特性」の確認に有効である。また、この既習の振り返りによって、経時推敲（時を経た事後の再省察でもある）が成立すると、自らの学びの伸長を知ることができるため、Cの肯定的な学習の価値意識を得ることが期待できる。事中の省察においては、互いに異なる文種換えに取り組んだペアで、相互評価を行うことを取り入れることで、実作と省察の繰り返しが生じる。これによって、AやBの定着・習熟・強化が期待できる。事後の省察においては、学習自体が自分にとって意味あるものであったかどうかを振り返る、授業評価的な省察が、Cの価値意識を高めることが期待できる。

この結果は、2021年3月発行の『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』の第43号に「書くことに関する『言葉による見方・考え方』とその指導法としての『文種換え』の研究(2)」という論文にまとめた。（査読なし、pp.15-26 <https://air.repo.nii.ac.jp/>）

(3) 「文種換え」の実践理論の体系化

さらには、「言葉による見方・考え方」の効果的な指導法となる「文種換え」について、実践理論の体系化を試み、一定の成果をまとめることができた。

文種の再定義

まず、「文種換え」をする対象となる「文種」とはどのようなものか、またなぜ「文種換え」が必要なのかを明らかにした。

「文種換え」が要請される国際的動向

「文種換え」が必要となる背景に、OECDのPISAや全国学力・学習状況調査の結果及びヨーロッパの言語力評価の枠組みなどがあることも明らかにした。

学習指導要領の対応記述

また、直接的に「文種換え」が要請される根拠として、言語活動例が内容に示されるよう

になった平成 20 年改訂の学習指導要領解説国語の関連記述を引用した。

文種特性を構成する 9 要素

そして、文種特性を 9 つの側面から整理し、これが文種換えの際にどう扱われるかについて述べている。

「文種換え」の教育効果 11 点

また、「文種換え」に期待できる教育効果を 11 点あげ、類似する研究や実践との異同を整理した。

「文種換え」の学年系統

さらに、小学校における「文種換え」の学年系統について、第 1 学年及び第 2 学年、第 3 学年及び第 4 学年、第 5 学年及び第 6 学年の 3 段階で試案を示した。

年間指導計画への位置づけ

そして、第 5 学年及び第 6 学年を例に、1 年間の国語学習の中での「文種換え」の位置付けを検討し、年間計画への配置例を示した。

この結果は、2022 年 3 月発行の『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』の第 44 号に「書くことに関する『言葉による見方・考え方』とその指導法としての『文種換え』の研究 (3)」という論文にまとめた。(査読なし、pp.15-24 <https://air.repo.nii.ac.jp/>)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 成田雅樹	4. 巻 第43号
2. 論文標題 書くことに関する「言葉による見方・考え方」とその指導法としての「文種換え」の研究（2）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要	6. 最初と最後の頁 15-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 成田雅樹	4. 巻 第42号
2. 論文標題 書くことに関する「言葉による見方・考え方」とその指導法としての「文種換え」の研究（1）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要	6. 最初と最後の頁 15 - 28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 成田雅樹
2. 発表標題 「言葉による見方・考え方」を得る授業・働かせる授業を考える-書くことの授業における「文種換え」を例に-
3. 学会等名 第37回秋田県国語教育研究会夏季研修会（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------